

CAMPUS HEALTH

保健管理センターだより No. 17



目次

1. 世界の食卓 (3)
2. いまなぜ『結核緊急事態宣言』?
3. 肩こりの原因とその解消法について
4. 自分自身を変換する
5. 大阪外国語大学ボランティア活動 (1)

OSAKA UNIVERSITY
OF
FOREIGN STUDIES
1999. 11

世界の食卓(3) サンパウロのなんでも屋

佐々木 敏

(本学 非常勤講師)

(国立がんセンター臨床疫学研究部)

人口1100万人、ブラジル最大の都市サンパウロは世界最大の日本人社会が存在する都市でもある。サンパウロ市内には約30万の日系人が住み、市の中心部に近いリベルダージ地区のガルボンブエノ通りを歩くと提灯を模した街灯と真っ赤な大鳥居が目を引き、日本語が飛び交っている。ここはサンパウロ州を中心に120万人にのぼるブラジル日系人が集まる場所でもある。しかし、顔は日本人でも2世になると漢字の読み書きは困難になり、日本語よりも公用語であるポルトガル語のほうが楽だという人が多い。

ガルボンブエノ通りから少し脇に入ったところに「なんでも屋」というカフェテリア形式のレストランがある。なまへの通り、なんでも食べられるというのが売りの店であるが、この日は日本食っぽいものを中心に盛ってみた(写真)。シロゴハンの上にフェジョアードという豆料理をかけたもの。「シロゴハン」とは味も色もつけていない日本人が日常的に食べているごはんのことで、ピラフやパエリアのような味付けがされた米料理に対する造語だと思われるが、サンパウロではかなり一般的に食べられ、そう呼ばれている。フェジョアードは、アフリカから渡ってきた黒人が、安価であった動物の内臓や塩漬け肉と豆(フェジョン)を煮て食べたことに起源するといわれるブラジルの国民的料理。このふたつがセットになるところがおもしろい。ぎょうざと焼きそば(日系人が持ち込んだため、ブラジルでは日本料理だと信じられている)。巻き寿司とさしみにみそ汁(これらは確かに日本起源)。たくあんと漬け物も添えてみた。味が混ざることなど気にせずに、一枚の大

皿に盛るのがブラジル流である。日本では小皿や小鉢に別々に盛るのがふつうだと友人に話したら「われわれはひとつの大きな国でこのように共存してきたのです。」という答えが返ってきたことがある。

ルーツを異にする移民たちがひとつの国で混ざり合うことは、日系人からみれば、さしみやみそ汁をこの国に持ち込むと同時に、他の移民たちが持ち込んだ食べ物や、ブラジルで豊富に取れる食べ物(例えば牛肉やフルーツ)を自分たちの食生活に取り込むということを意味した。ある調査によると、サンパウロ在住の日系人2世は、日本に住む日本人に比べて3割近く多い脂肪と2倍近いビタミンCを摂取している一方、さかなが食卓にのぼるのは週に1回半程度にまで減っているという。そして、かかりやすい病気の種類にも変化が認められている。心筋梗塞や乳癌が増加し、胃癌や脳卒中が減少していることが明らかにされており、それはかれらの病気が日本型から欧米型に変化したことを示している。その一方、欧米諸国に多い大腸癌は増加が認められず、ブラジルに移住した日系人の生活には大腸癌を増やさない何らかの特徴があるのかもしれないと推測される。「日系ブラジル人に生じた食生活の変化がかれらの病気にどのような影響を与えているのか?」それはまだ完全には明らかにされていないが、「どのように生活習慣が変わったらどのように病気が変わるのか?」、つまり「どのような生活をすれば病気を防ぐことができるのか?」移民はこの疑問に大きなヒントを与えてくれる国境と世代を超えた壮大な実験でもある。